

第4回島田市教育環境適正化検討委員会【議事概要】

●日時：平成29年9月21日（木）18:30~20:00

●場所：初倉公民館（くらら）2F

出席者

【委員】武井敦史（委員長）、池ヶ谷俊幸（副委員長）、福田秀樹、伊藤健太郎、良知克明、森山佳久、仲安寛、榛葉徹、小島忠光、伊藤冬久、畑浩、中村延也 【事務局】濱田和彦、畑活年、鈴木龍彦、池谷英人、田中義臣、渡辺武資、駒形進也、大石真司、和田英弥、廣田豊和

【傍聴人】23名

●【議事概略】

武井委員長より開会のあいさつ及び議事進行

傍聴の方もいるので、自己紹介と今までどんなことを目標に委員会で話し合ってきたかについて簡単に紹介する。

昨年までは学校の在り方検討会という形で議論を重ねてきた。非常に切迫した問題として、人口減少に伴い子どもの数が減っていき、これからもおそらく人口規模が減っていき、これからはどうしようかと考えられる。人口規模が減っていくということは、同時に市でまかなえる予算も減っていき、同じだけの規模の施設を維持しようとするとなれば財政を圧迫し、それが様々なところで支障をきたしていき、どうしようかと。そうした現状を前提とすると、長期的に見たときにどのような形で学校を配置していくのが島田市にとって最も望ましいのか。その中でどのような教育を行っていったらいいのか、同時に教育は学校だけで行われるのではなく、地域と学校の両方で子どもが育っていくため、地域が持続的に発展していくにはどうしたらいいのか、という難しい問題をどうやって両立させていくか、こうした3つの柱をたたせていくことを最大の課題として今まで話し合ってきた。

今日は第4回目である。第3回までは、様々な形で学校の現状の問題や長期的な見通しなどについて話し合ってきた。今日の委員会では、私が最初の30分ほど市全体の人口の見通しがどんなふうになっていくのかという簡単な見取り図を示し、そのうえで学校と地域が活性化していくためにはどのような取り組みが可能なのかについて、いくつかの考えられる手立てをご紹介させていただく。そのうえで、委員の皆様や会場にお越しの方々からご意見をいただき、次回以降、例えばこんな案が考えられるのではないかなというようにたたき台となるような案を、教育委員会、武井、市長の部局のいずれかから、いくつかの案としてお出しして、具体を詰めていくプロセスに入りたいと考えている。

説明に入る。この地域（田原市）を視察したらどうかという資料の紹介である。小さな規模の町であるが、かなり大きな学校再編を行い、それと同時に地域がどうしたら活性化するかについて心を砕いた地域である。田原市の教育長が本も出版しており、様々な話が聞けることを期待して視察の案として出した。

（資料）未来の学校規模想定図をご覧いただきたい。0歳児から小学校6年生までの各学年の児童生徒数を、おおよその推計値を使って小学校は平成35年度にはどのくらいの規模になっているか、中学校は平成41年度にはどのくらいの規模になっているかという全体を図にしてみた。図の見方は、横の長さが学年で、縦の部分がおおよその各学年の人数ということになる。四角の面積が児童生徒のおおよそ推

定の数を表している。

現在、島田市には多くの学校があるが、人口規模から考えるとすでに標準から比較しても多い。人口が減っていきとなおさら無理な状況がつのっていく。長期的には考えていかなければいけないことである。全体の学校数を減らすということは、施設設備の全体の総量を減らしていかなければいけないということである。同時にそのまま地域が活力を失うということになってはいけない。それをどのようにしたら両立させることができだろうか。なんとか人口が減っていく中でも地域の活力を失わないようにするためにはどうしたらいいか。全国的に試みられている様々な取り組みの中から、参考になるであろうという仕組みについていくつか参考資料を説明してみたい。

「放課後子ども教室と放課後児童クラブ」について

「特認校」について

「山村留学」について

「教育課程特例校」について

「義務教育学校と施設一体校」について

様々な仕組みを適宜活用しながら、島田市ではどのような学校の配置が望ましいのかについて考えていかなければいけないのかが長期的な課題である。

説明は以上で、これからの学校の在り方についても委員の皆様からご意見を賜り、説明で不十分なところはご質問願いたい。

各委員・傍聴者からの質疑・意見

・(委員) 適正協議会ができた時に挨拶の中で申し上げたが、子どもたちのためにということを考え、なおかつ今の情勢・財政面について、今のまま放置しておくことはできないだろうという考えの中で提案させていただいたのは「小中一貫校」だった。先ほど紹介していただいた制度の多くは、特別な施設を作る必要がないことが分かった。地域や市や子どものことを考えると、なるべく速やかに統合を進めていきたい。

・(委員長) ありがとうございます。

・(委員) いま紹介された制度には初めて見たものもあり、それについてここでは是非は言及できないが、どういうところを目指していこうかということについて議論すればいいと思う。すでに伊久美小が特認校でやっており、先ほど説明があった制度がすでに具体化しているわけで、制度を取り入れている学校の実情を我々が承知していかないと、そうした案を進めるべきかどうかについては、検証をしっかりとやるべきだと思う。

・(委員長) そうですね。具体的な案を出す段階で、地に足を付けた議論にしなければいけないので、実際に何がどのくらい効いてくるのかということについて、現時点で資料があるものについては、義務教育学校や施設一体校のように、始まったばかりの制度については成果がわからないものもあるが、資料を得られるものについては得て根拠を示していく必要がある。

・(委員) 特に小規模校をどうするかについていくつか例があったが、どのスタイルで島田の教育が取り組めるかどうか、どのパターンが地域的にいいのだろうかを判断する時に、現在、制度を活用しているところの課題などについて知りたい。そのあたりの説明あるいは現状認識をご説明いただきたい。

・(委員長) 今日は頭出しで、これから考えていく段階なので、何もないところからはアイデアも出ないだろうから、いくつかの制度を説明させていただいた。制度を活用している学校の現状がどうなって

いるかについては、今後調査していく必要がある。実際に制度を取り入れた方がいいが学校をまわせなければ話にならないので、地域の方々の協力なしにはいかんともしがたいものがある。そうしたことが実際にまわせるかどうかを現実的に考えていかなければいけないので、かつて取り組まれた山村留学については地域の負担は膨大なものになるので、そうしたことを含めて考えていかなければならない。

・(委員長) 何となくこう思うという感想でも構わないし、説明についての質問でもかまわないのでいただきたい。

・(委員) 誰もが今まで、現状が当然だという考え方しかない。そこに新しいものを入れることについては抵抗があると思うが、ここでやらなければいつまでたってもできないということが現実だと思う。どうしたらいいかと聞かれると困るが、なにかしら一つでもやっていくしか方法はない。伊久美小学校は、特認校に取り組んでおり、朝バスに乗って町中の子どもたちが山里の小学校に来て勉強し体験をしているという事業がすごく魅力的に感じる。そういった制度を、島田市として、はたしてもっと取り入れていけるのかどうかについて検討していく必要がある。

・(委員) 今朝、交通安全運動で学校の前に立っていたが、7時の島田駅発の子どもたちが5人ぐらい乗ってきた。先生方が言うには、4月以降そして夏休みを過ぎても子どもたちは、誰一人1日も休まず登校してきて素晴らしいですよと言っていた。人数が少ないからかな？と思うこともあるが、少し研究してみる必要はあると思った。副委員長が言われるように、島田でもっとのぼしていけるかというのはなかなか難しいと思う。一校ぐらいは可能性があるかもしれないが、いろんな検証をしなければいけないと思う。

・(委員) 島田市全体で考えなければいけないと思うが、例えば今日いただいた未来の学校想定図で見ると、島田北中の規模は小さい。具体的な数字で言うと平成41年は64人。現在128人だが、ちょうど12年後には生徒数が半分になる。実際にはいろんな事情でこない生徒もいると60人ぐらいだが、職員の数も減るし部活動という問題もあるし、そこに地域スポーツがどう絡んでいくかというような様々な問題があるが、自分の学校で見ても、通学区の調整や弾力化をやるにあたっては当然いろんな意見があるから、やり方を工夫していかなければいけない。こうやって適正化を図らなければいけない。それに付随して、通学の支援策を考えなければいけない。そこには文科省が出した小学生おむね4kmというようなものがある。さらに校舎の問題もあり、北中は築32年になり12年後半分の人数になる時には築44年になる。文科省のいう45年改築目安なのか、今進めている長寿命化80年つまりあと50年持たせるのか、そこにさらに、地域の避難所の問題も出てきている。自分の学校についても様々な問題が考えられ、どこから考えていいか整理してやっていかねければ大変だなあと思う。次回から具体策を考えるときには必要だと感じた。

・(委員長) これらをどうやって考えていくかというところに市民の知恵が問われる。全国的にみると毎年500を超える学校が統廃合でなくなっている。その多くは、大きな学校に吸収されるような形でなくなってくわけだが、私は単なる統廃合は市にとってもいいことではないと考えている。どうということかという、統廃合はその地域周辺に人が入ってきにくくなる。そうなると、市の栄えている部分がだんだんに面積的に縮小していくのと同じ現象が起こる。過密なところから人が少ないところに人が移っていくなら何の問題もないし望ましいことだが、現実には起きていることはそれと逆の動きである。ますます人口が減れば施設の維持が難しくなっていくと負のスパイラルに入ることが起こりうるので、施設のことやそこに住んでいる地域の人たちのことを考え、また、最大の優先は教育のことを考え、最適

な解は何かということを考えていかなければいけない。次回には、こんなことが考えられるのではないかとはいくつかの方向性を出してみたいし、皆さんからもこういうことが考えられるのではないかと案を出していただきたい。この会は、教育委員会の外部に設置された委員会なので、あくまでも主体性をもって議論ができると思う。いい案であって実現可能であればぜひ取り入れたいので、積極的に意見をいただきたい。次回以降出したものをもとに、手を加えるということもあり得るので、そんな形で皆さんの意見をいただきたい。傍聴していただいている方からも質問やご意見がありましたらぜひいただきたい。

・(傍聴者) 具体論でやらないと進まないと思う。私の住む初倉地区はいろいろな問題がある。地域の問題、人口が減っていくのではないかとという問題、まだまだこの地区は発展の余地がある地区だと思う。そんな中で小学校3校、中学校1校をどうやったら子どものためにプラスになっていくのか、距離のことや地域の発展性のことなど抱える課題は地域によって異なるので、地域に合わせて個別具体的に検討をしていけば進むと思う。

・(委員長) 次回以降は具体的な案がなければ進まないと思うが、この問題は単に小規模地区の学校の問題ではない。大規模地区の学校の問題でもある。小規模地区の学校の問題を全体で共有すべきだと思う。小さいから知らないということではいけないと思うので、あえて全体で議論したうえで、そのあと個別の具体について議論する仕組みをとっている。前回、北部の地域で話を伺い、今回はこちらの地域で話を伺うスタイルをとり、特に小規模校が多いのはこの2つの地域ですので、それ以降具体論に入っていくという段取りにしていることをご理解いただきたい。

・(委員) 田原市の例が出ているが、島田市と似ているのか？人口は？面積は？

田原市で7校を4校にしたが、どれくらいの移動距離があったのか？

・(委員長) 田原市は島田市に比べ人口はだいぶ小さいと思う。島田市は山を抱えているが、田原市は半島であるため、移動距離と言うより移動時間の問題だと思う。中学校6km小学校4kmという基準があるが、中学校であればおおむね1時間以内が1つの基準である。バスを使って1時間以内なら考えていいだろう。基準からするとどの地域も問題ないであろうし、島田市でも一部地域を除いては柔軟に考えていけるだろう。

・(委員) バスで一時間ですか？

・(委員長) 家からおおむね1時間程度なので、乗っている時間ではないと考えられる。ですから、バスで1時間を超える生徒が1人2人いるから、直ちにやめるということではない。

(委員長) 学校規模想定図を見ていただきたい。今まで文科省の基準でも出てきたクラス替えが可能な2クラス規模の基準に当てはめてみると、川根小学校は全体でいうと満たない。二小よりもちょっと小さい三小くらいの規模があるとだいたいクラス替えができる規模になる。ですから、教育上望ましいのはだいたいこのくらいの規模であると言える。それは絶対的な基準ではなく一つの目安としてである。

・(委員) 財政負担が非常に厳しくなる、放課後子ども教室と放課後児童クラブなど、放課後の子どもたちの過ごす場所については、文科省と厚労省に管轄が分かれているが、施設の問題だと考えたときに、例えば学校の空き教室を活用する時に出てくる問題として、管理の問題が出てくる。例えば壁をつくらなければいけない、ドアを新しくつくらなければいけないということはやむを得ないとしても、既存のものを利用することでやってくことも、行政サイドで検討すべきではないか。

・(委員長) 大きな可能性として出てくるだろう。既存の施設管理の責任問題が出てきて、どうしても学

校の一部に放課後児童クラブが入っているところはあるが、お互いに入り口を別にして管理を別にして
いる。その学校がフルに使えらるとなると、すべての施設を放課後子ども教室であるとか放課後児童ク
ラブにすることもできるので、そうしたことで活性化を図っていくことも考えられる。カリキュラムが過
密なので、地域のことをやろうとしてもゆとりがない。ところが、放課後子ども教室や児童クラブはす
べて自由ですから、地域でやりたいプログラムは何でもできる。活性化の切り札になりえるだろう。次
回以降、そうしたことも具体的に検討できるだろう。

・(委員) 子供たちのために何が望ましいかを PTA の方にも聞かなければいけないし、実際の先生方にも
聞かなければいけない。子供たちのためになにが一番重要なのか、いろいろな方向から見ていかなければ
いけない。地域としては小学校がなくなってしまうのはさみしい。小学校がいろいろな活動の拠点
になっているところもあるし、防災の避難所でもあるという位置づけになっていて、学校そのものが消
えていくことは避けたい。地域の活性化、人口減少、産業や地域の問題、学校の問題も考えながら進め
なければいけない。

・(委員長) 地域にとっては学校は重要だし、子供にとっては地域は心の支えになっていることも踏まえ、
また同時に学校教育のためには、ある一定の規模が必要であることも事実である。そうすると、学校の
中でも特に昼間の授業の部分はある程度の規模を備え、放課後の時間はより地元と関係を強くするよう
な形で活動を組み、教育の拠点としての今の学校のある場所はきちんと生かしていくという方向を考え
ていかなければいけないだろうと思う。

・(委員) 島田市がこれから人口が減っていくことに伴って子どもの数も減っていくというのは明確に見
えていくので、小中一貫教育は島田市の課題として考えていかなければいけないと思う。中高一貫でや
られている私立には明確な目的があり、入学させる目的があって進学させる。だが、小中一貫をやると
きに明確な目的がなければたぶん逆効果になってしまうと思う。小中一貫を誰のためにやっていくのか、
これを考えていくうえで、島田市としてのメリット・デメリット、地域のメリット・デメリット、保護
者のメリット・デメリット、子供たちのメリット、デメリット、それぞれのメリット・デメリットが必
ず発生してくると思うので、それらを明確にしていけば小中一貫をどういう形で進めていくのかとい
うことが見えてくると思う。そういうところを含めて考えていけば、小中一貫も必ずいい方向に進むと思
う。

・(委員長) 具体的な学校に立地を考えていかなければいけない。例えば一小、一中のように隣にあれば
先生が行き来するのも自由だしいろんなことができるが、距離が離れていたり小学校が二つに分かれて
いたりする場合には相当複雑になっていくので、これは具体の中で考えていかなければいけないと思う。

・(委員) 先生が提案してくださった具体例を実際に島田市に当てはめて実施する時に、どういう問題が
あってこの制度を取り入れたのか、これらをやったことでどういう効果があったのかがもっと明確にな
ってくると、僕らの学校に取り入れるメリットがわかってくると思う。今回は制度の紹介だけなので、
もう少し詰めた内容になった時には、もっと細かく教えていただいて、これは本当にやる価値があるん
だという風にもっていきたい。最終的には、市の財政の問題、地域の問題があるが、やっぱり子どもた
ちの将来ためということが大前提になると思うので、そこに重点を置いて考えていきたい。

・(委員長) 私も何もかも知っているわけではないので、一つ一つの事例で言えばまだまだ知らないこ
とがたくさんあるということが正直なところ。だからもう少し具体的を詰めていく中で、そうでないと
日本全国のすべての特認校を勉強するというのはいくら時間があっても足りないわけで、具体が出てく

る中で、似た地域でどうなっているのかということを含めていきたい。次回以降、具体的な話になっていく中でそういったことも考えていきたい。

・(委員) 具体的な話というのは、どことどこが合併したらどうなるかって話なんですよ？

・(委員長) はい。今日お示しした全体像をもとに、どことどこをどのように区切っていくか、学区を変えるということも仕組みとしては不可能ではない。学区をかえることも考えていい。それを含めて考えていきたい。

[事務局より委員長へ情報提供]

事務局の調べによると、島田市約 10 万人に対し、視察候補の田原市は 6 万人強。面積は、島田市は 316 平方キロ、田原市は 191 平方キロとだいたい 6 割程度、人口密度も同じくらいといえるのではないかな。

・(委員) 地理的な条件はどうか。

・(委員長) 地理的な状況はいろいろあって、必ずどんな地域にも違いがあるので、違う地域のものをそのまま取り入れていけばいいというそんな甘い話はないが、参考にする条件としては、離島やへき地でもないし都心部でもないの、いいのではないかな。

・(委員) 放課後児童クラブ以外に、放課後子ども教室があることを初めて知った。このご時世、学校統廃合は避けられない。仮に統合された校舎や施設をこのように活用できれば地域の活性化にはいいと思うが、逆に大規模校にもこの放課後子ども教室を当てはめるとなると、放課後児童クラブは自分の子どもは定員オーバーで入れないが、実際に預けたい親はかなりの数いるが、そういう親が大規模校でこういうのがあるってことになると、それなりの課題や施設が出てくるのではないかな。そうしたことを島田市として全体で広げるのか、地域として区切ってやっていくのかを考える必要があるのではないかな。放課後子ども教室は、市のほうで部門があって取りまとめるのか？完全にボランティアか？

・(委員長) 市は取りまとめるが、ボランティアや地域の方が子ども教室という枠組みで活動することが多い。市で全部こういう教室を開くから講師を募集して…とやるのは例外的。ただ、できないことはない。例えば、この地区でこういう活動を活性化したいから、市のほうへ講師を募集してそこに送ってくださいということもできるので可能性として考えていいと思う。

・(教育長) 島田の例をいいでしょうか。島田市の場合は、今まで初倉南小学校で放課後子ども教室をやっておりまして、指導員を 3 名お願いしてそのあと何人かの支援員、要するにボランティアをお願いして、いろんな活動をしている。子どもたちが一番楽しかったのは、クリスマスケーキ作り。遊びや体験からお楽しみまでいろんなメニューを持っている。放課後児童クラブの場所を広くしたいという要望があり、現在は岡田の公民館でやっている。所管課は社会教育課で取りまとめ、調整はそこでやっているが基本的には指導員やボランティアの方の自主的な計画運営で行っている。初倉地区で実際に行われていることを紹介した。

・(委員長) まだまだ発展させられる仕組みである。

・(委員) 子どものためとか、保護者の声とか、学校施設設備の充実とか、複式が生じない数や、クラス替えできる数がいいとか、保護者の考えもあるが、最後に求めているのは登下校の安全確保や、学力問題、人間関係の問題もでてきた。子どもがいない地域の方との話しの中で、学校がなくなると地域に光がなくなってしまう。地域の活性化や発展について考えると、やはり何らかの形で学校を残していくのかなあと、もう一つは地域文化の存続が保護者の声にもあった。地域で作り上げてきた文化を今後の

動きによって考えてほしい。

・(委員長) 最初にアナウンスし忘れたが、前回アンケートを取って見たらどうかというご紹介をして、そのアンケートが現在は回収までできている。集計はできていないが、全体の声は次回には集計したものを確定値まではいかないがお出しできると思うので参考にしたい。今ご意見をいただいた通り、登下校の安全、適正規模、学力、地域の特色を残してほしいという声も出ている。そうしたものをバランスを見ながら検討していきたい。

・(委員) 資料に田原市の再編計画があり 10 年計画で考えられているが、小学校が 20 校から 11 校、中学校が 7 校から 4 校になるという形になっている。10 年後の人口の増減が地域ごと出されているが、統合することで学校の近くに行きたいという保護者がでてくると思う。中学校、小学校から統合になった地域が、10 年後どのような人口の増減になっているか、もしかしたらこれをやることで遠い所の地域の子どもたちや若い人達が減って、地域が衰退していく可能性も出てくるのではないかと思うのだが、こういう計画は 10 年後のどういうところまでを計算してやられているのかわかりますか？

・(委員長) 私も聞いてみたいところである。そういう課題意識を持って、ぜひ聞きましょう。

・(委員) そこがすごく重要だと思うのですが。

・(委員長) 半減ですから、かなり思い切った計画である。それをどう見積もっているのかということぜひ聞いてみたいところである。

・(委員) 本校は大規模校だが、平成 35 年に 1 年生が 59 人の試算がでている。金谷小学校は何年か前に 6 学級で建てられているが、6 年棟に 6 個の普通教室がとれるようになっている。もし 59 人になった時に、4 つの空き部屋ができる、空き部屋は無駄にしているわけではなく、外国語ルームだとかいろいろな会議で活用している。小規模校の話がされているが、大規模校も子どもが減っていくことで、管理上いろんな弊害が出てくると感じた。そう考えると、小中一貫教育などで、小規模校だけでなく大規模校についても考えていかなければいけないと感じた。単純に思ったことだが、バスを使って 1 時間通学するとなると、本校では今日、子どもが熱を出してお迎えをお願いしたのだが、両親が働いていたため祖母にお迎えをお願いした。1 時間離れているところに、迎えに来てくださいとなかなか言えなくなる。学校から遠い所に住むのは不利だなと感じると心配でありよくないと思うので、学区の見直しなんかも必要になってくるのではないか。

・(委員長) 私もまったくそう思っている。当然、学校が遠くなると、バスを出すということは最低条件としてあると思うが、学校が離れているということで、新しく入ってくる人が躊躇するようなことは最大限避けなければいけない。そのためにどんなことが可能かについて考えた時に、今の学校は形を変えるにせよ拠点として機能する形にしていかなければならない。例えば、考えられることとして、統合された学校で朝からおおむね 3 時まで過ごす。その後は、今ある現校舎の場所にバスで移動して来て、そこで放課後児童クラブや放課後子ども教室を行えば、保護者は今ある学校に迎えに行けばいいわけですから、ある程度拠点としての機能を残すことができるし、その部分には地域の方が深くかかわっていただけると考えられるので、今以上に深い関係を築くことができる。そんな工夫をいろいろと組み合わせながら、将来の明るい未来像をこの委員会で考えてみたいのでお知恵をいただきたい。まさに今のようなご意見がビジョンにつながると思うのでよろしくお願ひしたい。

・(委員) 学区の話が出ましたが、10 何年か前の勤務校で、教育課程特例校の申請をしようとしたときに、小さい規模の学級が多いということで、もう少し大きな人数での学びのメリットを考え、学校を行き来

して授業が構成できないだろうかと考えたが、ネックになったのは移動に時間がかかるというところがなかなかクリアできなかったため、申請したが通らなかった。そうすると今言ったような学区を見直すことがその通りだと感じた。今後いろいろな方法論の具体で検討されると思うが、子どもたちのためにどんな教育を提供していくのかという、島田市のビジョンとして「夢育・地育」という言葉が出ているが、その具体として島田市の子どもたちにはこういう教育が受けられて、将来のことを見据えてこれからどう生きていくのか、そのために必要な力はこれだろうというものをきちんとみなさんと共有した上で、どういう方法をとっていけばいいのかという核となることを明確にしていくことが大事だと思った。

・(委員長) 昨年度の委員会以来、「夢育・地育」という 2 つのキーワードを使って考えてきた。その整理は夢育の方は、現代の変化に機敏に対応していくため、プログラミング教育、異文化理解教育、英語学習など、社会変化に適応した教育をきちんとやっていくことが重要であろう。地育の方は、地域に根差して地元の周りのことを見据えた教育をしていこうと、まだ具体はこれから詰めていかなければいけないが、少なくともその 2 つの柱は外せないだろうということまで議論している。これ以降、教育の中身について別の委員会で議論されていくべきであろう。それと合わせた感じでこの学校再編について考えていく必要があるだろう。

・(委員) 次から具体的なことに入るが、小規模校、大規模校、これから過密校が出るかもしれない。市全体で考えるけれども、地域は早期の適正化をはかる地区もあれば、中長期的に図る地区もあるということに分けながら考えていくことが必要だと思う。

・(委員長) 特に重要なのは、校舎の耐用年数や建築年数がある。耐用年数が 60 年、長寿命化をすると 80 年と言われている。2,30 年しかたっていないのに、それをつぶして別の形ということは考えにくいし、逆に 60 年に近づいていけば早期に判断していかなければならない。まずどこから考えなければならないというロードマップも必要になっていくと思う。もう一方で考えることは、耐用年数を残して統廃合すれば、残った校舎は十分使える校舎が地域に残るため、その方がいいという考え方もできる。取り壊して耐震が切れた校舎は建て替えの費用は出てこないから、更地にするか取り壊すか地元でお金を出していくという形になると思うが、耐用年数が残っていればその間は自由に使えるのでそういう考え方もできると思う。

・(委員) 防災の避難所についても加味してそこまで考えた方がよいのか？熊本地震の時には耐用年数がダメってことで新聞に大きく取り上げられたが、中長期的に考えた時に、この委員会で？一方的にこうしましょうと言っても、避難所どうなる？と言われたときに、そうしたことについてこの委員会でも話し合っただけの方がいいのか？

・(委員長) 当然考えていかなければいけないと思う。知識が不十分ではあるが、例えば、体育館のようなものがあれば事足りるのか、すべて残さなければいけないということではないと思うので、避難所としての機能を最大限どう残すか、ほとんどの学校が避難所になっていると思うので、その部分も当然問題として入ってくると思う。

・(傍聴者) 教育環境適正化の意味が、話を伺っていてわかった。早期の対応と、中長期の対応があり、小規模校だけでなく大規模校の問題でもある。しかし、小規模校は待ったなしの状況にきている。教育環境の適正化の中身は両方を含んだ計画的なものであると同時に、委員長が出してくれた学校の在り方も含んでおり、非常に難しい課題であるため、どこから突っ込んで話していいのかわからない。具体的にというお話が出たので、私の場合初倉地区なので、「湯日小学校どうなる？」というのが私の考え方。

湯日小学校は地域のコミュニティの場所だから「何とかしたいね」「何とかならないか?」と考える。同時に、出された図が視覚的でわかりやすかった。これを一目見るとどことどこを一緒にしたら財政的にはいいのではないかという見方もできるが、それだけでいいのかということも見て取れる図になっている。この図の面積が小さい学校ほど、地域とのつながりは強いということも考えられる。保護者がどういう気持ちを持っているかも重要である。親が仕事に車で出て行ってしまうと、我が子もこの小さい学校に通わせるより、大きな学校に通わせた方がいいと思うかもしれない。それを優先すると、その地域はどうなってしまうということも考えなければならない。教育は公のものだから、島田市としてどういう教育をするかという基本線をガッチリ作っておいてやらないと、地域も衰退してしまうのではないか。親の希望もわかるが島田市として学校教育を地域でどうやって行ったらいいかを地域で持っていて、地域を保証するようなシステムを作らなければいけないと考えた。これからは情報化社会なので、たとえ施設が離れていても、違う場所にいながら一緒に活動できるのではないか。小規模校同士で、情報機器を使いながら連携するとか、情報機器の活用を大々的に取り入れるなど、島田が学校教育をどういう形でしていきたいかということを明確に打ち題していくと形が見えてくると感じた。

・(委員長) うまくまとめていただきました。まさに、島田の教育の未来を考える一番のきっかけは、昨年の学校のあり方検討会だった。本委員会ではハードの部分について話し合っていきたい。ゆくゆく具体的な話し合いになっていくが、どのような教育をしていくのか、どのような学校配置がいいのかについて考えながら進めていかなければいけない。また、長期的な社会の変化を見通して行わなければならない。皆様からの最大限のご意見をいただきながら、小規模校だけの問題にしてはいけないというのが私の信念であり、島田市全体の問題として考えていきたい。小規模校の地域であっても大規模校の地域であっても、道筋は違っても将来に明るい見通しが見えるように考えてみたい。今日いただいた意見を参考に、案を作成し次回以降に個別具体論に入っていけるようにお持ちしたい。皆さんもぜひ案を出していただきながら、より見通しのあるデザインをつくっていききたい。